Minokamocity museum vision

みのかも文化の森ビジョン
R3-R12

みのかも文化の森ビジョン策定にあたって　P1

なぜだろう・なぜかしら

みのかも文化の森ビジョン策定の趣旨　P2

みのかも文化の森の理念と活動方針　P3

みのかも文化の目指す将来像　P4

みのかも文化の目指す森のイメージ　P5

みのかも文化設立当時の思い・願い　P6

これまでの取り組み　P7

主な取り組み

平成 25 年度地域創造大賞受賞

枠にとらわれない取り組み（最近の展示活動）　P12

「おどろきとこだわりのミュージアムグッズ」展

「まちのいいもの よいところ―山之上―」展

「使い込むほどに 暮らしの今むかし」展

みのかも文化の森の機能と役割　P13

これからの視点　P14

何を　誰に　どのように

課題をみすえた取り組み　P15

短期的取り組み

長期的取り組み

機能と役割に関する検証とふりかえり　別紙

資料　P24

なぜだろう・なぜかしら

私の人生を決めたと言っていい一冊の本があります。

父親が唯一買ってくれた本で、「なぜだろう・なぜかしら」という小学生用の科学の本です。

「星はなぜ光っているの？」、「なぜ雲は空に浮かんでいるの？」。疑問に持ったことさえなかった質問に強烈なショックを受けたことを覚えています。

その後、同様な本に興味を持ち、最終的には「百科事典」を読むことが楽しい小学生でした。

何かを不思議に思う。これは人間にとって重要な感覚であり、人間だけに与えられた能力のような気がします。自分の生活している環境に疑問が生まれると、それを理解しようとする努力が生まれ、それが理解できた時には、大きな喜びと深い感謝を感じることができます。さらには、それを改革、前進させようとする意欲も生まれてきます。

人間として生きるためには、「なぜだろう」が絶対に必要だと思います。

「なぜだろう」はその時々の条件で偶然に得ることはできます。

しかし、未来を創る子供たちの偶然を待つことなく、「なぜだろう」を提供する環境やタイミングが大切だと思います。それを、「文化」を通して提供できる場所が「文化の森」です。

これまでの 20 年間、文化の森は、自然、歴史、郷土など様々な「なぜだろう」を提供してきました。

ちょっとした「なぜだろう」が子供たちの人生に多様性を与え、また子供たちの「なぜだろう」を通じて私たちも「さらになぜだろう」という新たな意欲を得ることができました。

これからの 20 年も、さらに「なぜだろう」に磨きをかけ、新時代にふさわしい「なぜだろう」を提供していきます。

美濃加茂市長　伊藤　誠一

みのかも文化の森では、資料の収集・保存、調査研究、展示活動や学習活動を、学校や各種団体等との連携を深めるとともに様々な取り組みを行ってきました。この連携や取り組みが、この分野の本や論文、研修会や学会などで事例として取り上げられたり発表されたりし、全国的にも注目され評価されています。

しかしながら、激しく変化する社会の中で、これまでの取り組みを通して見えてきた課題や地域博物館として今までになかった様々な役割や機能を果たすことが求められてきています。収集・保存、調査研究、展示といった機能にとどまらず、地域社会と連動して従来の枠にとらわれない活動が期待されています。地域住民の皆さんとともに資源の再発見をし、特性を抽出し、それを活かしてまちを文化的で質の高いものにしていくこと、学校教育と交流を深め博物館らしい自由で深まりのある学びを共に考えていくことがこれからの重要なテーマになってきます。

開館してから 20 年が経ち、これを機に今までの取り組みを振り返るとともに、「この博物館がこのまちにあってよかった」、「ちょっと誇りに感じる」と思ってもらえるような地域博物館になるにはどうしたらよいか、市民の皆さんと「協働」していかに活動をしていくか、森や施設を活用した事業をどのように展開していくかなど、博物館運営をしていく上での方向性をここで示す必要があると考えました。博物館としての機能や役割を整理し、理念や方針に基づいた今後のあり方や将来像を明らかにし、現代的課題もみすえたこれからの取り組みなどを提示して、新たなビジョンとします。

ビジョンの位置づけ

このビジョンは、第６次総合計画に沿った内容であり、本市の博物館運営を推進していくためのものと位置づけ、本市のまちづくりの基本理念である「みのかも市民憲章」を尊重するものとします。
また、ビジョンに掲げた使命・将来像の実現に向け、長寿命化計画に基づき施設の計画的な更新も行っていきます。

ビジョン期間

文化の振興は、その成果が現れるまでに比較的長い期間を要し中長期的視点に立って取り組みを進めることが重要になります。ビジョンの期間は、令和 3 年度を初年度とし、令和 12 年度までの 10 年間とします。なお、社会情勢の変化によって適時修正等を行うとともに、毎年、各種施策等の進捗状況を把握し、ビジョンの評価・検証作業を行います。

みのかも文化の森の理念

「さまざまな地域資源が活かされ、ここで自由で深まりのある文化活動と多様な交流が行われるよう願っています。人々の「くらしの一部」として利用され続けるとともに、まちや社会にとって必要とされる場になることを目指します」が、みのかも文化の森の理念・ミッションです。

みのかも文化の森の活動方針

理念に基づき、次の４つを基本的な方針として活動を展開しています。

❶自然との共存

豊かな里山や森のたたずまいをたっぷり「体感」できる場でありたいと思います。
身近な自然や生態系から学ぶことの大切さを知り、くらしの豊かさを考える場とします。

❷学校教育との連携

ミュージアムにある様々なモノやコトをいかした、感動と深まりのある学びができる場とします。さらに、子どもが将来にわたって幅広く知的好奇心を持ち続けられるよう支援します。

❸市民のちから

市民の自由な発想と自発的な動きはミュージアムの活動をささえます。協働しておこなう新しい取り組みや企画は、新しい力や可能性となって次へつながっていきます。
市民の力を大切にします。

❹地域の交流拠点

「博物館」や「教育・文化」という枠にとらわれることなく、地域の資源を活かした人々の交流がさかんになり、地域のハブやよりどころとして必要とされる場として活動を進めます。

みのかも文化の森の目指す将来像

ひとにとって「心のよりどころ」

一つ目は、ひとにとって「心のよりどころ」となる森です。

- 暮らしに刺激や潤い、「心の健康」をもたらす学びの場
- 日常生活にゆったりと溶け込み、次への行動のきっかけとなっていく場
- 地域の良さを知り愛着（シビックプライド）をさらに高めていく場

まちにとって「地域のよりどころ」

二つ目は、まちにとって「地域のよりどころ」となる森です。

- 地域資源を調べ、整える場
- 地域の課題を共有し、さらに良くするために考える場
- 人と地域社会をつなぐ「ハブ」としての場

みのかも文化の森が目指す森のイメージ

ビジョンの策定と同時に、みのかも文化の森の「森」により親しんでいただけるよう、そのイメージを言葉にしました。

『想いをめぐらし、はじまる森』

みのかも文化の森は、この地を作り上げている自然、歴史や文化、そしてアートなどいろいろなものを提供しています。

しかし、何も一つの答えを用意しているわけではありません。五感を駆使して好奇心をふくらませ、気分を楽にして自由に思いを描ける場です。「博物館」といった枠にとらわれず、日々のくらしに潤いをもたらし、地域のよさを発見する、ひろがりと繋がりの出発点として、人々に身近な森であり続けることを目指します。

美濃加茂市という「まち」の今後に関しての役割

そして、美濃加茂市という「まち」の今後に関しての役割です。

合併後、美濃加茂市は 70 年近くが経過し、より成熟したまちになっていくには、まち特有のオリジナルなものをどれだけ活用し、アイデンティティとして表現できるのか、そして一つ一つのことがらをどれだけ深まりをもったものにするのかが問われています。

みのかも文化の森は、「より深まりのあるまち」になるための重要な役割があると考えます。そのために、将来を見据えてたえず検証を重ねながら地道に活動をすすめていきます。

みのかも文化の森は、多くの皆さんに支えられて2000年(平成12年)10月1日に開館しました。開館までには、建設予定地の調査や文化の森という博物館の基本構想などを検討する準備期間が 10 数年ほどあり、この準備期間の話し合いなどがみのかも文化の森の活動の柱となり、今の活動を支えています。

みのかも文化の森が開館するきっかけは、昭和55年に『美濃加茂市史』が刊行されて3年経ってからでした。『美濃加茂市史』の編纂の際に多くの資料が集められ、その後、先人たちが使っていた暮らしにかかわる道具や民俗資料についての調査が始められました。その民俗資料を保存して展示する資料館の構想が持ち上がったことが最初のきっかけでした。

様々な検討ののち、博物館と教育センターを同じ施設として建設する案が出され、全国どこをみても、例のない複合施設の案が出ました。

昭和 58 年に「市郷土資料館建設基金条例」を制定し、市として初めて文化の森の建設の意思表示を行いました。平成2年度には地元説明会、平成3年度に建設方針の策定、平成4年度・5年度には、基本設計等を行いましたが、財政的事情や他の大型プロジェクトの実施により工事の予算化ができませんでした。

平成 8 年度から計画が再スタートされ、この年から開館するまでの期間、いろいろな人々の意見を聞き、紆余曲折、試行錯誤しながら開館の準備を進めました。最初に理念ありきだったのではなく、関係する人々との議論や協力者との共同作業が何年も繰り返され、そんなプロセスを通してミュージアムの「理念」や「目指すべきもの」がだんだんと浮かび上がり、市の未来に思いを馳せみのかも文化の森を開館しました。

2000.10.1「みのかも文化の森　要覧」より

みのかも文化の森が、心の時代21世紀にふさわしい施設としてオープンの運びとなりました。

この文化の森には、ミュージアム(博物館、美術館)と教育センターの機能を併せ持つ本館のほか、生活体験館、民具展示館、アトリエ棟など多様な施設が、約 9 ヘクタールの広大な森の中に配置されております。

これらの施設と自然環境、そして多くの市民・ボランティアの方々の生涯学習に寄せる情熱によって、美濃加茂地域の歴史をたどりながら未来に思いを馳せ、また自然に親しみながら生き物との共存を考えることができます。

さらに、創作活動や美術鑑賞などにより豊かな心を育むとともに、昔の人々が営々と積み上げてきた生活体験などにより先人の知恵を学び取ることができ、子どもたちが「自ら学び、自ら考え、自己の生き方を考える力を身に付ける」ことができるのではないかと思います。

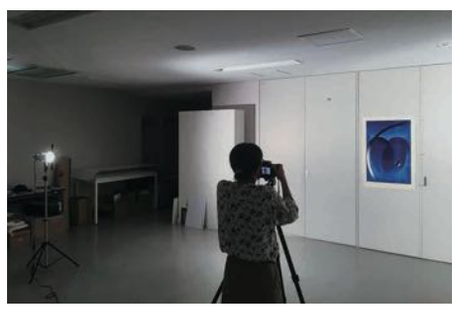
このように文化の森が、「森の学校・市民ミュージアム」として、またさまざまな世代の人々の交流の場として「交流のまち美濃加茂市」のシンボルとして、多くの方々に集い親しまれる場所となることを祈念いたします。

美濃加茂市長　川合良樹

文化の森は、地域総合博物館として、活動の柱である「自然と共存」、「学校教育との連携」、「市民のちから」、「地域づくり」のもと、これまでさまざまな取り組みを行ってきました。
文化の森のこれまでの主な取り組みを紹介します。

01
取り組み

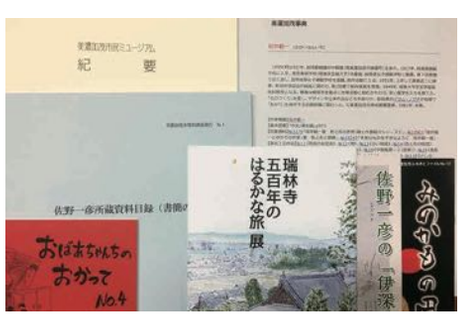
資料、作品の収集・保存



歴史、民俗、考古、美術、自然等の資料や作品を博物館資料として収集し保存しています。地域総合博物館としてこれまでに取り組んできた活動を理解していただき、また、収蔵庫等の保存環境や人的体制を整えていることなどから、市内・市外に限らず想いをもった多くの方々から貴重な資料や作品を寄贈いただいています。それらの資料や作品は、地域の魅力を高め未来に継承するための貴重な地域資源として収集・保存しています。

02
取り組み

資料、作品の整理・調査・研究



収集・保存したものを学術的、専門的に調査・研究を行っています。資料や作品を整理し、データベース化（美濃加茂事典など）するなどし、ホームページや印刷物などで公開しています。特徴的な取り組みとして、データを用いて展示を行ったり、市民ミュージアム活動や学校活用に活用したり、大学と連携し調査・研究を共同で行ったりしています。また、研究内容等の論文が掲載された「紀要」を毎年発行しており、図録やふるさとファイルなど毎年多くの成果物を発刊しています。

03
取り組み

展示活動

地域に関わりのある資料を中心に、展示替えを行いながら常設的に公開しています。また、この地域に関わりの深い特定のテーマを設け、企画展などを開催しています。特徴的な取り組みとして、地域の人々と共に研究や調査をし発表したり、各分野を横断するテーマを設定し展示したりしています。また、市域に留まらず、岐阜県全体にまで視野を広げ地域文化を調査したり､全国的な視野で「芸術と自然」をテーマにしている作家を招聘し、滞在型で作品を制作・展示してもらうことを行っています。

04
1
取り組み

学習機会の提供・団体の支援

市民ミュージアム活動としてさまざまな講座を企画して学習機会の提供を行っています。また、それぞれの学習機会に応じてボランティアの皆さんの豊富な経験や知識を活かし、ボランティアの皆さんと協働して講座やイベントなどを行っています。子育て女性支援も数多く実施してきました。現在、生活体験、イベント、学習支援、展示、アート、伝承料理の会など６つのボランティアがあり、多くの方が登録し活動しています。伝承料理の会では、博物館の外にも出向いて地域のことを調べ、聞き取りを行い、成果を報告する活動も行っています。

04
2
取り組み

市民参画

市民ミュージアム活動としてさまざまな講座を企画して学習機会の提供を行っています。また、それぞれの学習機会に応じてボランティアの皆さんの豊富な経験や知識を活かし、ボランティアの皆さんと協働して講座やイベントなどを行っています。子育て女性支援も数多く実施してきました。現在、生活体験、イベント、学習支援、展示、アート、伝承料理の会など 6 つのボランティアがあり、多くの方が登録し活動しています。伝承料理の会では、博物館の外にも出向いて地域のことを調べ、聞き取りを行い、成果を報告する活動も行っています。

05
取り組み

学校との連携

文化の森ならではの「人・もの・こと・場」を活かしたさまざまな学習を学校とともに立案し、活動を行っています。この活動は、市内小・中学校の年間指導計画に位置付けられ、活動を希望する市外の学校も受け入れ、年間約 8,000 人の来館があります。特徴的な取り組みとして、単なる社会見学施設の場ではなく、学校の先生と学習内容を考え、事後も先生と学習内容について振り返り、6 年間かけて博物館で学び積み上げ、博物館を通して学び続ける人を育てる「モデル」活動として注目されています。

06
取り組み

人物を活かした活動

郷土の偉人である坪内逍遙博士や津田左右吉博士をはじめ、市に縁のある人物を調査・研究し顕彰するとともに、人物を活かしたさまざまな取り組みを行い、また、新たな事業につなげています。特徴的な取り組みとして、提唱した朗読に関する活動、早稲田大学と連携した演劇をはじめとした活動、大学と連携し学生による演劇を行ったり、演劇を通じた文化交流の取り組みを行っています。

07
取り組み

情報の公開と発信

文化の森のホームページを充実させるとともに、収蔵している資料を整理したものをデータベース化してホームページ上で公開しています。また、ホームページ内にある「森の日記（ブログ）」やインスタグラム、メール配信サービス（すぐメール）などのさまざまな媒体を活用して、文化の森で行っている活動や展示会情報、施設内の作品、森の風景、収蔵資料やアートなど、一人でも多くの方に文化の森の魅力を知っていただくために情報を発信しています。

08
取り組み

利用しやすく魅力ある施設

皆さんに心地よく来館いただくために、施設の雰囲気や美観に配慮し、森の整備や良好な環境整備を行っています。特に、施設内にあるカフェと共同して文化の森にあるものをモチーフにしてランチやデザートを制作しています。また、文化の森のキャラクターやロゴ入りグッズ、収蔵品をデザインしたグッズなどミュージアムのグッズを充実させるとともに、ミュージアムグッズ展を開催するなどミュージアムの魅力を発信し来館者に楽しんでもらう取り組みを行っています。

財団法人地域創造　「平成 25 年度地域創造大賞（総務大臣賞）」を受賞

平成 25 年度に地域における創造的で文化的な表現活動に功績のあった文化施設に対して贈られる「地域創造大賞（総務大臣賞）」を受賞しました。自然を体感できる空間を生かした複合型体験施設として、朗読や演劇、食文化などミュージアムの枠にとらわれないテーマも含め、幅広く多彩な活動を継続して行っていることが高く評価され、ボランティアによる運営や来館した市民の協力も受賞理由の一つとなっています。

また、地域ミュージアム（地域総合博物館）というのはその地域のためにあるのは当然であり、方向性が時に内向きで閉鎖的になってしまいがちですが、みのかも文化の森は、絶えず視野を外に向け、質的に高い活動を進めている点が評価の対象になっています。

「おどろきとこだわりのミュージアムグッズ」展　（2016年4月）

本展では、国内外で開発・販売されている「おどろき」と「こだわり」のミュージアムグッズを展示しました。日本のミュージアムグッズ開発の知られざる歴史や制作のエピソード、グッズを手にしたお客様の思いと共に紹介することができました。ミュージアムグッズを通じて、互いの考えや思いに気づき、交わり合いが深まっていくような楽しい場を創造することができました。

〇少しでも「博物館を身近な存在に」を目的に
〇小規模だからできる身軽さ

「まちのいいもの　よいところ－山之上－」展　（2017年12月）

本展では、山之上まちづくり協議会をはじめとする市民の皆さんとミュージアムが一緒になって「まち」を訪ね、見つめてきたことについて、伝え合うことができました。山之上では、「まち」の見どころや名物といえるような、大切なモノや場所に根ざしたコトに、ヒトが集うことで、今も「自慢」が創り上げられているといえます。

〇博物館にとって「地域」とは何かを考える
〇小学校の校区こそが住民にとってのコミュニティ、まとまりの場

「使い込むほどに　暮らしの今むかし」展　（2018年4月）

本展では、これまで生きてきた人々が暮らしの中で、小さなこだわりと大きな愛着をもって使い続けたもの、そして今なお使い続けているものを展示し、むかしも今も変わらぬ、ものに対する人の気持ちや日々の暮らし方を考える機会としました。

〇ふだん使い込んだものを持ち寄ってもらう
〇「ここまで使っている鉛筆コンテスト」を開催。各年齢層からの出品
〇民俗系の領域ではあるが、いわゆる「古臭い」ものではなく、今の人が関われる接点を見つける

P5 ～ 9 で紹介した 20 年間のさまざまな取り組みを検証して、文化の森の機能と役割を考えます。

A　あつめる　まもる　しらべる

■　収集・保存（蓄積）　■　調査・研究

①資料、作品の収集・保存　②資料、作品の整理・調査・研究

B　つたえる　かつようする

①人に関して　（還元・活用）

・モノを通して知的好奇心を刺激し続ける場
・多様な価値観に気づき、イメージを築く場
・知的な心地よさを感じる場

②地域に関して

・地域の良さを発見して、発信する場
・地域への愛着や誇りを生み出す場
・さまざまなモノをつないでいく磁場としての場

③展示活動　④－１学習機会の提供、団体の支援　④－２市民参画
⑤学校との連携　⑥人物を活かした活動　⑦情報の公開と発信

C　交流（ハブ）、居心地の良さ

⑧利用しやすく魅力ある施設

D　新たな役割

何を

①「より知的好奇心を刺激される場に」
②「より地域を、身近なものに」

・地域の特有なものを収集調査し、特性をひろい出す
・展示品や収蔵資料から、それがある身近な場所へいざなう

誰に

「より多様な人々に」

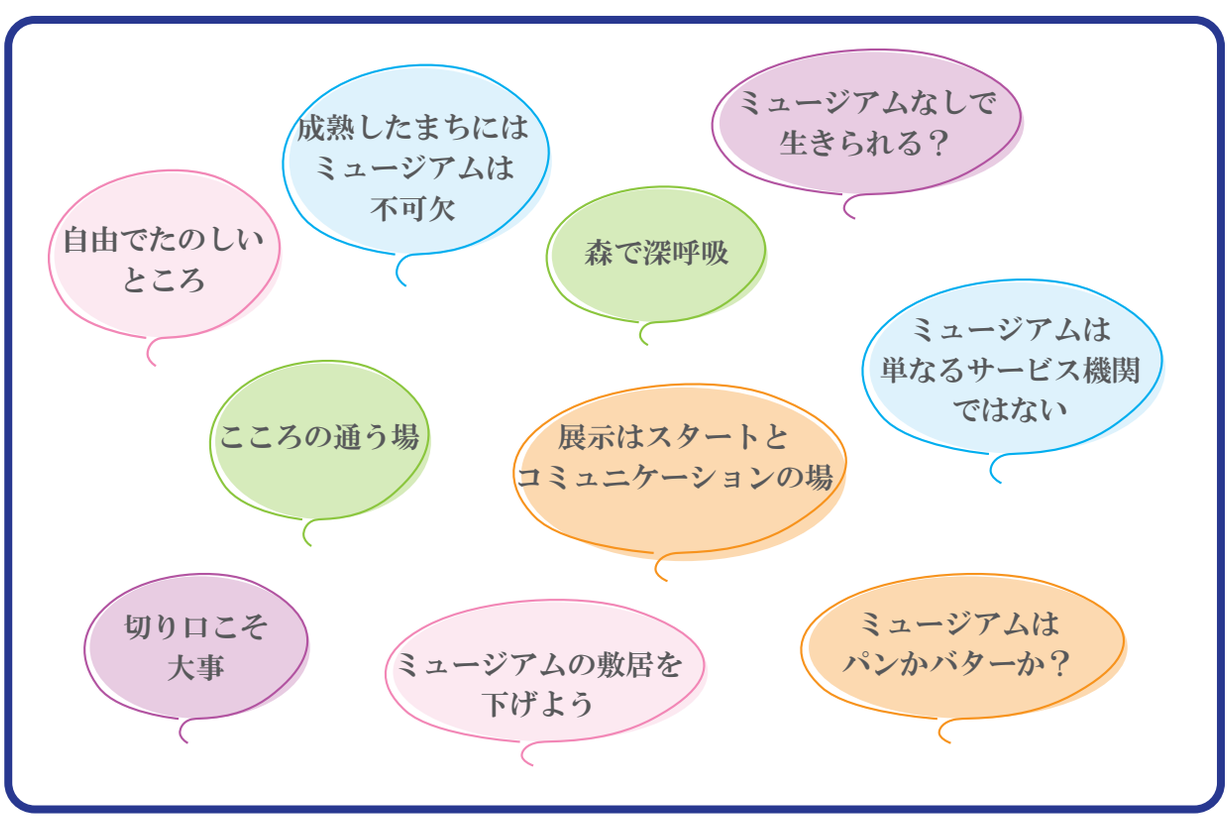
例えば、高校生、高齢者、外国人市民、乳幼児とその保護者
そんな人と関わり合いを持つハブとして

どのように

「より好奇心をくすぐるように、より暮らしに近づくように」

・「教える」から「引き出す」といった考え方や手法を大事にする
・市民との共同企画により、好奇心のポイントを見直す

たえずこのような目的と対象、方法を意識して仕事を行っていきます。



皆さんの「くらしの一部」として利用され続けるとともに、まちや社会にとって必要とされる場として、今後、取り組むべきことは次のとおりです。

短期的取り組み

- 収集調査など基盤的活動及び地域資源データベースの充実
- 「気づき」と「築き」が起きる常設展示室の充実
- まちの特性や「いいところ」を共有し、深めていくさまざまなプログラムの実施
- 乳幼児や中高生、在住外国人など関わりの少ない年代層への取り組み
- 回想法などを用いた高齢者の元気につながるプログラムの展開
- ボランティアを中心とした市民団体との協働プログラムの充実と組織の強化
- 学校活用における子どもたちの心の変容につながるプログラムの改良
- ホームページや SNS を通した広報活動の積極的な展開・地域のよさを知り、実際に現地へ行ってもらうためのスタートの場としての展開
- 防災教育としての場の展開

長期的取り組み

- 知的な心地よさを感じられるための施設整備
- 地域課題解決に向けた地域との連携・協働
- 地域の情報を集約し発信するための施設整備
- エコミュージアム（市全体が博物館）の概念に基づいた事業展開
- 立地の良さを活かした博物館の有効活用
- 「NEW NORMAL 新たな日常」の中での博物館の在り方
- 社会的包摂にもとづいた事業展開
  社会的包摂…「全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」という理念
- SDGs の実現に向けた博物館の取り組みの推進
- 第６次総合計画及び「健康プラス（＋）ライン」に基づく事業展開
- 持続的な博物館運営を支える財政基盤の確立や人材の確保
- 公共施設等総合管理計画及び長寿命化計画に基づく施設整備

資料①　資料収集方針

みのかも文化の森・市民ミュージアムは、開館以前から現在に至るまで、地域に根差したミュージアムという基本的な考え方のもと、自然史、考古、歴史、民俗、美術工芸、文化などの広範囲な分野の資料や標本、作品、そしてそれに関する情報を収集し保存しています。地域とは、美濃加茂市及び市域の資料や事柄をあらわすのに必要な周辺圏域を指します。

収集の基本方針は

❶地域的な特徴・特性をあらわし、価値があると認められるもの

❷学術的に価値があると認められるもの

❸現代の社会に発信・提起するミュージアムとして収集する必要があると認められるもの

としています。

なお、その上で、各分野における収集品の特徴と収集にあたっての留意点は次のとおりです。

○自然史部門

・蜂屋層群中村累層に関する標本類

・加茂地域の生態を特徴づける動植物標本類

・文化の森敷地内などにある里山に関する動植物標本類

○考古部門

・牧野小山遺跡に代表される縄文期考古資料

・為岡遺跡に代表される弥生期考古資料

・文化の森が立地している尾崎遺跡考古資料

・石器石材としての下呂石

○歴史部門

・「坪内逍遙」「津田左右吉」をはじめとする人物資料

・織田信長をはじめとする戦国期の古文書

・林亮三、小栗憲八らの記録したものを含めた現代資料

・美濃加茂市合併前の旧役場文書

○民俗部門

・佐野一彦が残した昭和 30 年代を中心とした写真・記録類

・旧岐阜県蚕業試験場資料を含めた養蚕関係資料

・蜂屋柿など生業に関する資料

○美術工芸部門

・「芸術と自然」を主題とする作品

・ゆかりの作家作品の特徴の一つである版画作品

・1997 年まで開催された彫刻シンポジウムに関連する資料と作品

資料②　常設展示室の方向性と考え方

みのかも文化の森・市民ミュージアムは、開館 20 年目を迎えて、館としての今後の方針を踏まえ、常設展示室をより存在感のあるものにするために、展示の改善を行いました。全面的に展示品を入れ替えたり、大型のジオラマを変えたりするなど、いわゆる「リニューアル」という形ではありません。

ここで改めて原点に立ち返り、展示されているリアルな資料・標本・記録に来場者がじっくり向き合い、それらが語ることを感じたり考えたりする場にしたいと考えます。多面的な観点を提示しながら来場者にとっての、新たな「気づき」と「築き」が起きる展示室をめざします。

美濃加茂市内には歴史や文化を物語る数多くの文化財や地域資源が残されています。そして市民ミュージアムには、様々な分野の膨大な資料が収蔵されています。展示・紹介される資料は、そのほんの一部ですが、より身近なこととして伝わるよう工夫し、来場者がこの地のよさや奥深さを考え、まちの再認識や誇りにつながっていく展示室をめざします。

留意点は次の 3 点です。

❶モノから、さらなる好奇心へ繋げる

展示資料は様々な情報を持っています。それらを知識として「教える」のではなく、その人なりに感じたり、気づいたりしてもらえるような自由な学びの場となるよう工夫をします。「きっかけ」と「ふかまり」そして「ゆらぎ」の空間です。

❷モノから、人の思いへ繋げる

展示資料には、必ず人が何らかの形で関わっています。資料から、それを見つけ出した人、作った人、使っていたひと、考え関わった人などを感じさせる、その状況に思いを馳せるような展示を考えます。

❸モノから、現地やフィールドに繋げる

展示資料は、最初から展示室にあったわけではありません。もともとは、ある場所にあったものやその場所で起きたことを、ここに移動し展示しているに過ぎないのです。実際に森の中や現地を訪れ、そこの空間とともに事柄を感じてもらえる、いざないの場となるよう試みます。

ようこそ「常設展示室」へ

「常設展示室」って、なんか難しそうな名前ですが、ここはこの地域の良さや奥深さをみなさんと共有する場です。気持ちを楽にして室内を自由に巡ってください。ならべてあるもののほとんどが本物・実物です。存在感のあるリアルな展示品から「何か」をそれぞれで感じていただきたいと思います。バーチャルなものからは得られない世界をお楽しみください。展示品のそばには関連する説明文などが添えてありますが、それらは何かを覚えてもらうために置いてあるわけではありません。みなさんの興味関心を深めてもらうためのちょっとしたお手伝いにしか過ぎません。まずは、展示をじっくりと見ていただき、何か一つでも「なぜかな」「この次の展開は？」とか「これを作った人はどんな人だろう」などと、好奇心をふくらませ、展示品の「向こうの世界」に思いを巡らせてもらえたらうれしく思います。さらに、展示をご覧になったあとに「今度こうしてみよう」「現地を訪れてみたい」などと、みなさんの日々の暮らしの発想やこの地に住む楽しさに繋げていただければ最高です。次へのスタートの展示室です。

展示室はコミュニケーションの場でもあります。つぶやいてください。大声でなければ、会話をしてもらっても構いません。また、お聞きになりたいことがあれば、総合案内をとおして遠慮なく学芸員に声をかけてください。

また、「常設」といっても、展示品などの内容は機会のあるごとに変化、充実させていく予定です。

この展示室が、みなさんの心に響き、記憶に残る場となることを心から願っています。

常設展示室 20 年目の「模様替え」にあたり

2020 年 10 月　美濃加茂市民ミュージアム

みのかも文化の森・市民ミュージアムは、開館前から学校が博物館を活用しながら学習活動を行うことができるよう、学校活用のプランを検討してきました。開館の 2000 年は「総合的な学習の時間」の全面実施の時期と重なったこともあり、すべての学年での多教科の活用を目指し活発な検討を学校とともに行い、そこでの議論が今の活用の基盤となっています。

■文化の森だから実現できる学校活用の特徴

・子どもの実態や学習指導要領をもとに、活用プログラムを検討の上、作成しています。
教科の授業としてカリキュラムに位置づけることで、単なる見学だけで終わらない継続的な学習の機会となることを考えています。年に一度はどの学年も来館できることを目指し計画をします。

・文化の森の「人・もの・こと・場」を活用することで、「本物」との出会いを活かした「ここでしかできない活動」を通して得られる気付きや感動を大切に、深い学びを目指しています。
四季おりおり姿を変える自然や太古の人々が住んでいた証である遺跡や遺物、周囲の風景に溶け込んだ彫刻など、この文化の森という場が持つ空気感も含め、すべてが「本物」から学ぶ素材です。

・文化の森では様々な人との出会いがあり、人の言葉からと人の姿から学ぶことができます。
学校の先生や保護者以外の大人であるボランティア、隣にいる友達や博物館のスタッフである学芸員と話しをしたこと、かけられた言葉、思わず口からでた言葉など他の人の関わりを大切にし、この積み重ねが豊かな学びにつながります。

文化の森という「教室」で、新しい気づきや知ることの喜び、楽しさのきっかけがどの子どもにも手に入れられる、そのような学習のあり方を築いていきたいと考えます。文化の森の学校活用は、子どもたち全員が等しく得ることができる「博物館の原体験」です。

■学習の効果を高めるために

・学校との日程調整や活動準備など、学校活用に関わる業務を担当する学習担当を配置しています。

・各活用の前に学習担当と担任の教員が必ず顔を合わせて打ち合わせを行います。活動内容だけでなく、活動のねらいや事前事後の学習とのつながりなど、各学校や児童生徒の実態に合わせた活動内容とすることを大切にしています。

・子どもたちの学びに寄り添い声を掛ける、時には講師となる学習支援ボランティアがいます。
担任の教員や保護者以外の大人の姿から多くの刺激を得られます。

・学校活用で来館する際の交通手段としての「バス」を市の予算で手配しています。

・市内の小中学校では、校務分掌として「文化の森活用委員」を１名配置しています。
その教員と文化の森の職員が「文化の森活用委員会」を設け、学習活動の工夫や運営について話し合います。

・文化の森活用委員会での結果や一年間のプログラム、活用の教員による振り替えりをまとめたものを『文化の森活用の手引き・活用実践集』として毎年刊行しています。
・文化の森での学びが子どもたちの中でどのように捉えられているのか、長期にわたる関わりによる変化を知る手がかりとして、6 年生アンケートや成人式アンケートを実施しています。ここでの学びの経験やあり方を検証し、改善に努めています。

以上のような文化の森の学校活用は、次の 3 点につながると考えます。

一つ目に博物館という場での出会いの経験を通して、生涯にわたり博物館と関わり学ぶ楽しさを知ること、二つ目に、その枠にとらわれず心豊かで文化的な市民となる素地を育むこと、三つ目に、未来を創りだしその担い手となることのできる「市民」を育むことです。

「文化の森へ行こか。」美濃加茂市を訪れる友に自慢できる施設。
「すごいね。」エントランスに入って驚く友の声を聞けるのが誇らしい。
「子供たちの声が元気だね。」体験できる施設の歓声がうれしい。
文化の森も２０歳。
「ここで見たサイや展望台の景色を一生忘れない」成人式での新成人。
「もう２０年も経つの」体験学習を手弁当で主催されるボランティアの方々。
多くの方の知恵と汗で実現した「市民の誇り」。
最先端技術の時代にこそ必ず残り続ける「市民の財産」
これからも皆さんと一緒に、目指すべき道を守り続けます。

▲ みのかも文化の森 正面玄関にある看板

みのかも文化の森
美濃加茂市民ミュージアム
MINOKAMO CITY MUSEUM
〒505-0004 岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1
TEL.0574-28-1110 FAX.0574-28-1104
http://www.forest.minokamo.gifu.jp/